

地域に根ざし、地域に学び、地域を拓く人を育む学校の地域貢献活動

県立市原高等学校

I ～地元洋菓子店とコラボした商品開発～

本校は、平成31年（令和元年）4月1日に、市原高校と鶴舞桜が丘高校が統合して、新・市原高校として生まれ変わりました。統合後は、普通科と園芸科を有しています。普通科は、2年時に商業コースを選択でき、3年時には福祉コースを選択できます。園芸科は、2年時に草花・野菜・緑地管理コースを選択できる学校です。統合後の校訓として、地域共創・自主自律を掲げています。

1 地域の食材を活用し商品開発を通じた地域への貢献と地域の活性化

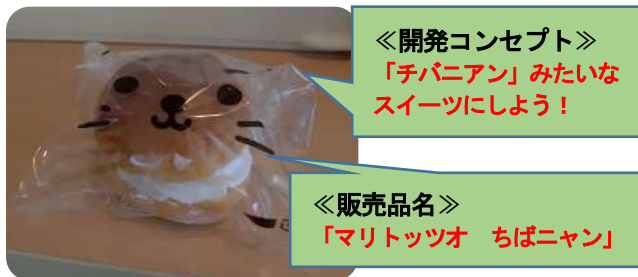
普通科3年生選択科目「フードデザイン」を選択した生徒10名が、千葉県や市原市の生産物を知る中で学習の成果として地域の果物を活用したお菓子作りができないかとアイデアを出し合いながら試作品を作り始めたのが出発点です。3回の試作品づくりと試食を通じて、思いのほか良いお菓子が出来上がったので、地元の洋菓子店に相談して一緒に商品化ができないかとプロジェクトがスタート。さらに、試行錯誤を繰り返しながら3つのプレゼン用の試作品を作り上げました。生徒の代表とともに試作品を持ち、洋菓子店でプレゼンを行い、結果、1つの試作品が採用されました。レシピと共に、洋菓子店に商品開発をお願いしました。



左の市原市姉崎産のイチジクジャムを使った試作品が採用されました

2 地元洋菓子店との協同商品開発

わずか数週間で、生徒たちの思いをくみ取った商品化に向けた試作品第1号が完成。試食と感想を店主に伝えるとともに、商品名と個包装のデザインを決定しました。1か月限定販売という条件で1つの商品が店頭に並びました。



《開発コンセプト》
「チバニアン」みたいなスイーツにしよう！

《販売品名》
「マリトッツォ ちばニャン」



「ブリオッシュ」
牛乳・バター・卵を多く使った発酵パン

「イチジクジャム」

「生クリーム」

「イチジクジャム」

完成したスイーツの正式名称は「ちばニャン～イチジクとバターの香りをのせて～イチジクとクリームのマリトッツォ」としました。

店頭販売が始まったとの知らせを店主からいただきフードデザイン選択者全員でお礼のあいさつと店頭販売の様子を見に行きました。

商品完成後の生徒のアンケートには、「自分たちで考えた商品が、販売されてうれしかった」「よい経験になりました」「市原市を改めて知るよい機会になりました」「商品開発ができて楽しかったです」などの感想が寄せられた。

千葉日報でも大きく取り上げていただいたおかげで、地元の住民からも「なかなか商品が買えないんだけど。」「地元の洋菓子店とコラボしたんだね。美味しかったよ。」と高評価をいただきました。

11月中旬から約1ヶ月限定販売で、販売総数は757個でした。

本校では、今後も地元の食材を使った商品開発を地元の企業と共同開発という形で、生徒たちに原案作成、試作品づくり、企業へのプレゼンそして商品化を通じて生徒たちに成功体験という感動を味わわせたいと考えています。さらに、地域の方々と連携・交流することで地域活性化の一助となる取組を進めていきたいと思ひます。



店頭で陳列されたコラボ商品



開発にご理解と協力いただいた吾妻堂店主と記念撮影

II ～高齢者施設に創作かるたを贈呈～

本校には、普通科と園芸科がありますが、普通科の生徒は、福祉の授業を受けることができます。

普通科の2年生が全員、社会福祉基礎を2単位履修し、さらに福祉の学習を深めたいという生徒は3年時に福祉コース（定員18名）に進みます。福祉コースの授業は、生活支援技術（5単位）、介護総合演習（R3入学生までは3単位、R4入学生からは4単位）で、その時間内で『介護職員初任者研修』を行っています。その研修を担当しているのは、福祉教諭2名と特別非常勤講師9名で、単年度（10か月）内で研修をまとめている点が特徴です。

1 コロナ禍における地域高齢者施設との連携

本校では、普通科2年生全員が福祉教科の科目「社会福祉基礎」を学んでいます。指導に当たる石塚教諭は、「科目を学んでいる生徒たちに高齢者施設を訪問させ、高齢者とコミュニケーションをとったり、高齢者とともにレクリエーションをするなどのふれあいボランティア活動をさせることを考えたが、コロナ禍で施設の中に入るのが難しいため、訪問をせずに高齢者のために出来ることは何かないかと考え、2学期の後半に4～5時間を使い、かるたを制作してプレゼントすることにしました。」と制作とプレゼントの経緯を話してくれました。

2 高齢者施設に創作かるたを贈呈

2年生1名が生徒代表として、介護老人保健施設クレイン（市原市石川）の施設長に完成した「創作かるた」を2学期終わりに贈呈しました。贈呈した創作かるたは、取り札がA5サイズ、読み札はA5サイズを少し小さくした大きさです。取り札と読み札を分けやすくするために、読み札をA5サイズから少し小さめのサイズにするなどの工夫を行いました。市内の高齢者施設にプレゼントするために4セットを分担して延べ4～5時間かけて制作しました。



創作かるたを入れた収納ケース



ケースに収納した創作かるたの一例



2年生を代表して同施設を訪れた山中さんは、「施設の方々に喜んでもらえるように、かるたの文章や絵を工夫しながら書きました。施設の方々の笑顔を想像しながら楽しくかるた作りをすることができました。」と語りました。施設長は、「入所者は、かるた好きな方が多いので、非常に助かります。活用させていただきます。」と笑顔で語りながら受け取っていただきました。

千葉日報にも当日の様子を取り上げていただきました。

贈呈式当日の様子や練習時の様子は、学校のホームページ（市高NOW No. 263 や普通科福祉コースのページ）に掲載してあります。

後日、本校教諭が市内の他の3施設を訪れ、残り3セットも贈呈しました。

後日談として、福祉コースの「先輩の職業体験を聞く会」時に、創作かるたを贈呈した施設に勤務をしている卒業生が来校した際に、かるたの利用状況を聞いてみたところ、「楽しみながら、よくかるたをする方々が多いですよ。」という話が聞けました。

本校では、引き続き創作かるたを作成し、市内の高齢者施設に贈呈することで、地域の方々との交流を深めていきたいと思っております。



創作かるた贈呈時の様子

Ⅲ ～高齢者施設にレクリエーションDVDを贈呈～

本校では、普通科の3年時に福祉コースを選択することができます。選択した多くの生徒たちが介護職や看護師等を目指します。コース内の授業では、福祉教諭2名と外部から招いた特別非常勤講師9名で、「生活支援技術」「介護総合演習」の科目を活用して『介護職員初任者研修』を行っています。単年度（10か月）内で研修をまとめている点が本校の特徴です。

1 コロナ禍における地域高齢者施設との連携

一昨年、本校吹奏楽部は、演奏動画を市原市内の高齢者施設に贈り、施設内でのレクリエーション時に視聴していただきました。演奏動画を贈ったいくつかの施設からお礼の手紙をいただき、生徒の励みになる取組があったことが、福祉コースの生徒によるレクリエーションDVD制作の出発点です。福祉コースの生徒たちは、高齢者施設を訪問してのボランティア活動が新型コロナウイルス感染症予防の観点から難しい状況となりました。そこで、福祉コースの生徒たちが吹奏楽部の協力を得ながら生徒と一緒に音楽に合わせて体を動かしていただくDVDを制作して、施設内で一緒に少しでも体を動かしてもらえればと考え高齢者施設に贈ることを決めました。



練習・撮影時の様子

2 市原市内高齢者施設27か所にレクリエーションDVDを贈呈

コース選択の生徒3年生14名は、合計14時間かけてレクリエーションDVD制作に向けて体操の練習と準備を進めました。生徒が主体的に、全員参加のオリジナル体操とグループ単位の体操と体操の振り付けとナレーションを考えました。高齢者が無理なく体を動かせるように、高齢者の動きを想像しながら4つのリズム体操（全体1つ、グループ3つ）を何度も撮影しては映像を見て改良を重ね制作しました。

参加した生徒たちは、音楽に合わせて体を動かすことに集中しすぎたために、全体を総括するリーダー役の生徒から「もっと楽しそうに笑顔を見せて」と何度も指示がでていました。

千葉日報にも取組の様子を取材していただきました。取材当日の様子や練習時の様子は、学校のホームページ（市高NOW No. 274）に掲載してあります。



市内27の高齢者施設に贈呈したDVD

生徒たちは1年間の学習の集大成としてDVD制作にあたり、「高齢者が、DVDを見ながら楽しく一緒に踊っていただけたらうれしい」との思いで取り組んできました。

施設の方からは「高校生の動きに合わせて楽しく体を動かしています。」と好評な感想だけでなく「体操の動きが少しゆっくりすぎる。」と改善点を指摘していただいた感想もいただくことができました。

本校では、引き続きいただいた感想を参考にしながら、改良版のレクリエーションDVD制作を継続し、施設の方々や高齢者に寄り添えるような取組と交流を深めていきたいと思っております。

IV ～絵本の読み聞かせを通じた園児との交流～

本校では、図書委員会の生徒が絵本の読み聞かせを通じた地元のこども園との交流を12月頃に行っています。

1 コロナ禍における地元こども園との交流・連携

新型コロナウイルス感染症の影響で、本校図書委員会が取り組んできた「絵本の読み聞かせ」交流が止まってしまいました。コロナ禍でもできる取組を考えようと交流再開に向けてのプロジェクトが動き出しました。交流経験者がいなくなってしまうために、最初に取り組んだのは県中央図書館から講師を招いての「読み聞かせ講習会」です。生徒に本に対する興味・関心を喚起するため、近隣こども園で読み聞かせボランティア実現を目的に、絵本の読み聞かせの専門家を招き指導を受けることで、読書指導の充実や読み聞かせ力の向上を図りました。



読み聞かせのグループ練習

2 リモートによる絵本読み聞かせで園児と交流

こども園との入念なる話し合いの結果、リモートによる絵本の読み聞かせボランティアの実施が決まりました。1・2年生の図書委員会の生徒13名が、本校図書室とこども園をネットでつなぎ読み聞かせを実施しました。生徒1名は司会者となり、残りの生徒は3人一組で、読み、絵本のページめくり、ページめくりのタイミング指示の担当者となり、園児41名に絵本の読み聞かせ（5歳児対象13人、4歳児対象9人、3歳児対象11人、2歳児対象3人、0～1歳対象5人）を合計で5回行いました。



本校図書室の生徒の様子



こども園側の園児の様子

スクリーン越しに映る高校生からお話を聴いた4～5歳の園児は画面越しに真剣にお話を聴き、0～3歳の園児は絵本の絵と同じことや手を振るなど反応が高く年齢による違いが見られました。3歳の女の子は「読んでくれてうれしかった」とふだん園では手を上げない園児が手を上げて、高校生とお話をしたいと反応を示してくれたそうです。5歳の男の子も「絵本が楽しかったです」と感想を聞かせてくれました。リモートによる初めての読み聞かせの試みでしたが園児は、反応や興味を示してくれました。

生徒たちは、「園児の反応がすごくかわいかった。すごく素直で、読んでいる側も楽しかったです」（3歳児を担当し、「おむすびころりん」を読んだ1年生女子）「0～1歳の園児たちがわかるようにゆっくりしゃべったが、難しかったです」（「だるまさんの」を読んだ1年生女子）と感想を述べた。司会を担当した生徒は、「みんな最初は慣れていないのでぎこちなかったが、だんだんテンポよく読めるようになって良かった」と各グループの取組の様子を語りました。

千葉日報に取組の様子を掲載していただきました。



席を立ち画面の高校生に反応する園児

本校では引き続き、図書委員会による絵本の読み聞かせボランティアを通じて園児や地域との交流を深め、本校生徒のコミュニケーション能力を伸ばしていきたいと思えます。

V ～植栽を通じた地域との交流～

本校園芸科66名は、2年時に野菜・草花・緑地管理コースの3つのコースから1つを選択することができます。草花コースを選択した生徒たちは、自分たちでデザインを描き、植栽を通じて地域の方々との交流を通じてコミュニケーション力の向上を図っています。

1 館山自動車道上り線市原サービスエリア花壇の植栽

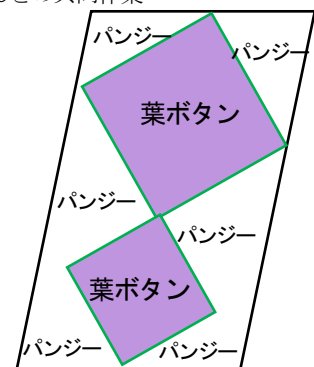
草花コースの生徒たちは、年に2回（6月と11月）、館山自動車道上り線市原サービスエリア内の花壇で草花の植栽を行っています。3年生が初夏の花壇、2年生が初冬の花壇を担当します。生徒たちが案を出し合ってテーマを決め、花壇のデザインを完成させます。草花コースの授業内で大切に育ててきた季節の草花苗を用いて、(株)ネクスコ・メンテナンス関東の職員と一緒にコミュニケーションをとりながら、花壇に1つ1つ丁寧に草花を植えていきます。



(株)ネクスコ・メンテナンス関東の皆さんとの共同作業

2 生徒のデザインを生かした花壇づくりで地域貢献

サービスエリアの一面に、市原高校に任されている花壇があります。不特定多数の方の目に触れる機会がある場所のため、より一層の責任感を持って取り組んでいます。本番に向けてデザインを決めるだけでなく、メインとなるデザインの図案をもとに、事前に実寸大の花壇の図面を描いたうえで草花苗を配置して、角度を変えたり脚立の上からバランスを確認しながら、デザインの最終決定を兼ねて、生徒の分担と動きを確認しています。作業本番時は、生徒たちが(株)ネクスコ・メンテナンス関東の職員にイメージを伝えながら共同作業を依頼します。特に、初夏の花壇作成時は、炎天下の中での作業となるために、職員の方々との連携、水分補給や休憩など、コミュニケーションが大切になってきます。



2年生の案



草花のポットを置き、見え方や必要なポット数を確認



ブルーサルビアで市原市の市章を描いた3年生デザインの花壇



2年生がデザインした花壇

植栽を行った生徒は、「デザインを事前に学校で練習していたので、本番はてきぱき動くことができました。本番では(株)ネクスコ・メンテナンス関東の方と話をしたり、コミュニケーションを取りながら楽しく作業をすることができました。」「皆で協力してデザインをきれいに再現することができました。花を置くバランスなど難しい部分もありましたが、練習していたので、しっかり配置することができてよかったです。」と取組時の様子を語りました。

(株)ネクスコ・メンテナンス関東の職員は、「学校の様子や生徒さんたちの考えなど、いろいろな話をしながら楽しく作業ができ、年2回の市原高校の生徒さんとの花壇植栽をとっても楽しみにしています。市原サービスエリアの環境美化にご尽力いただき感謝しています。」と感想を話しました。

取組の様子は、学校ホームページ(市高NOW No.165, 254, 332)に掲載してあります。

本校では、引き続き、市原サービスエリア内の花壇の植栽を通じて地域の環境美化に尽力します。

VI ～その他の植栽を通じた地域との交流～

1 小湊鐵道上総牛久駅ホームの草花による装飾

本校の生徒の多くが、上総牛久駅を利用して通学をしています。駅のホームにある花壇に花がなく寂しい状態が続いていましたので、上総牛久駅の駅長に提案をして、昨年度から駅ホームにある花壇に園芸科の草花コースの生徒が育てた草花の苗を定期的に植え変えたり、植栽した鉢植えをホームに多く置くことで、駅を利用する地域の方々や観光客に楽しんでいただいています。



駅のホームにある花壇の植栽



駅のホームにおかれた植栽したプランター



2 地域のコンビニ店舗前の草花による装飾

本校の生徒が、登下校でお世話になっている地域のコンビニエンスストアの店舗入り口付近に植栽したプランターを置かせていただき、お店の店長や従業員の方々との交流を進めています。従業員の方々の中には、花の手入れが上手な方々が多いので、花が長く開花しています。花の手入れが上手で、花の開花時期が長いので、生徒とのコミュニケーションも弾んでいます。来店者に、本校の生徒が育てた草花を楽しんでいただいています。



店長さんと一緒に活動しています

3 女子ゴルフトーナメント会場での装飾活動

草花コースと緑地管理コースの生徒たちが協力して、毎年4月下旬に市内ゴルフ場で開催されるゴルフトーナメントにおいて、草花コースの生徒が育てた草花苗6,000ポットを使いデザインを考え、ゴルフトーナメントを華やかにするお手伝いを市原市役所協力のもとで実施しています。



草花苗の入ったケースごとに置いていきます



今年は6,000ポットの苗を使用
斜面があるので、運搬も一苦労です



即席の花壇の完成
春を感じられる花壇の完成です

4 その他の植栽活動

- (1) 市原市役所第一庁舎入口に植栽したプランターを定期的に設置し、来庁者を草花でおもてなし。
- (2) 房総里山芸術祭いちはらアート×ミックス2020+における展示会場の花壇の植栽で来場者をおもてなし。

「ちばニャン」の断面は地層のように見える



市原市牛久の県立市原高校(常泉香澄校長、生徒330人)の生徒が、市内にある国天然記念物「チバニアン(地磁気逆転地層)」をイメージしたスイーツを発案し、近隣の菓子店と共同開発した。地元特産のイチジクを使っており、かわいい猫の顔を描いたパッケージに包み「ちばニャン」とネーミングし、期間限定販売を始めた。

チバニアンがスイーツに!?



チバニアンをイメージしたスイーツ「ちばニャン」をPRする市原高校の生徒＝市原市の吾妻堂

開発に取り組んだのは、普通科選択科目でフードデザインを学ぶ3年生10人。「チバニアンみたいなスイーツ」のコンセプトに基づき、アームを呼んでいる洋菓子のマリトツツオを作ろうと提案。1カ

市原高校生発案 地層イメージ

特産イチジク使用、限定販売

たスイーツの正式名は「ちばニャン」イチジクとバターの香りをのせてイチジクとクリームのマリトツツオ。イチジクのジャムを塗ったパンに生クリームをサンドしており、控えめの甘さと酸味のハーモニーが絶妙な味わい。横から眺めると、5層の色の重なりが地層に見える。

生徒たちは「味のバランス調整に苦労した」「見た目を工夫し、試行錯誤した」と振り返り、稲葉美紀さん(18)は「市原高は、牛久地域の発展を目標に活動しています。その目標に近づき協力したい」という思いで、市原名産のイチジクを使って、お菓子を作りました」とPRした。

吾妻堂の串田総一社長は「市原のイチジクは甘みや酸味、肉厚なポリウム、食感、ジューシーさが魅力。生徒のアイデアを基に、地域に根差した商品を作らせていただきました」と話した。1個350円で約1カ月間、限定販売予定。問い合わせは吾妻堂 ☎0436(92)1200。

令和3年11月18日(木) 千葉日報掲載

リモートで絵本読み聞かせ



リモートで園児に絵本を読み聞かせする高校生
市原市の市原高校図書室

市原市の県立市原高校（常泉香澄校長、生徒330人）の生徒が、市立牛久認定こども園（同市皆吉）の園児を対象に、リモートによる絵本の読み聞かせボランティア体験を行った。画面越しのコミュニケーションだったが、園児の反応は上々で、絵本に興味津々だった。

市原 画面越しに園児と交流

同校では、地域連携とボランティアの一環として、これまでも継続的に同園児に読み聞かせを行っていたが、コロナ禍の影響で2年ぶりの取り組みとなった。

リモートは今回が初めてで、図書委員会の1、2年生13人が参加し、同校図書室とこども園をネットをつなぎ実施。司会のほか、3人1組（読み役、ページめくり役、めくりタイミング指示役）になり、「おおきなななび」「おむすびころりん」などの作品を0〜5歳の年齢ごとに計5回読み聞かせた。



スクリーン越しの読み聞かせに喜ぶ園児。市原市の牛久認定こども園

4、5歳児は真剣な表情でスクリーンに見入り、0〜3歳児の中には絵と同じ仕草をしたり手を振る姿も。3歳女児は「読んでくれてうれしかった」と高校生との交流を喜び、5歳男児は「絵本が楽しかった」と話した。

生徒は「園児が分かるようにゆっくりしゃべったが、難しかった」「良かった」と感想を述べていた。

創作かるたを介護老人保健施設クレインに届ける市原高生(右) | 市原市



創作かるた楽しんで

市原市の県立市原高校(常泉香澄校長)の2年生がアイデアを出し合い「創作かるた」を完成させ、市内の高齢者福祉施設4カ所にプレゼントした。生徒は、高齢者がかかるたで楽しんでる姿を想像しながら制作したという。

同校2年生は、社会福祉基礎科目を全員が学んでおり、高齢者施設で交流やレクリエーションをする「ふれあいボランティア活動」を検討していたが、コロナ禍で施設内に入るのが難しいため断念。訪問せずに高齢者のために何かできないかと考え、かるたを作ることを思いついた。

市原高生、高齢者施設に贈る



市原高生が寄贈した創作かるたの1組

かるた(A5判)は「◎」た。石綿明美さんは「高齢者が見やすいように文字を大きくする工夫をした。なかなか良いアイデアが浮かばなかったが、高齢者の方々が楽しむ姿を想像しながら絵を描いたので、とても楽しい経験ができた」と話した。

生徒を代表し、山中花音さんが介護老人保健施設クレイン(同市石川)に1セットを届けた。教諭を通じ、介護老人保健施設梅香苑(同市馬立)、特別養護老人ホーム高滝神明の里(同市駒込)、特別養護老人ホーム緑祐の郷(同市養老)にも贈られた。



DVD制作に向け、体操する市原高校の生徒=市原市

体力づくりで一緒に体操を!

市原高校生レクリエーションDVD制作

「おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に体を動かしてみませんか」と、市原市の県立市原高校(清泉香穂校長)の生徒が、音楽に合わせて体操する姿を収録した「レクリエーションDVD」の制作に励んでいる。新型コロナウイルスの感染拡大で引きこもりがちの高齢者の健康を心配し、動画を撮影。ナレーションなどを入れて編集し、市内の高齢者施設へ配布するつもり。

コロナ禍 高齢者施設配布へ

同校は福祉教育に力を入れているが、コロナ禍で施設を訪問してボランティアの練習を始め、音楽の二部活動をするのが難しいことから、ビデオを収録しようと考えた。制作に取り組んでいるのは「福祉コース」で学ぶ3年生14人。

昨年12月から生徒自ら振り付けたオリジナル体操の練習を始め、音楽の二部は吹奏楽部が協力。無難な

「ビデオ撮影時には「もっと」と言っても飛び交った。細端のどかさんは「コロナ

く体を動かせるように、スローテンポで演奏してもらった。高齢者の目線で、撮影は4パターンあり、3班に分かれて体操するグループ曲は「銀河鉄道999」「YOUNG MAN(ヤングマン)」「上を向いて歩こう」を採用。全員が参加する全体曲は「川の流れるように」を選んだ。

で外出できない中、高齢者た。ビデオを見ながら優しく手助けできたと思いき、一緒に踊っていたけれど、高齢者の体力つらら」と呼び掛けた。DVDは焼き増しし、市橋那智さんは「体を介する特別養護老人ホームや介護老人保健施設など所々にプレゼントする。

市原市内27か所の高齢者施設にDVDを寄贈



令和3年度
千葉県立市原高等学校 吹奏楽部&福祉コース

リズム体操



- 1 銀河鉄道999
- 2 YOUNG MAN (Y.M.C.A.)
- 3 上を向いて歩こう
- 4 川の流れるように

演奏: 千葉県立市原高等学校 吹奏楽部
体操指導者: 千葉県立市原高等学校 福祉コース